

地方行政

◎昭和23年7月9日 第3種郵便物認可◎毎週2回刊・木曜日発行(但し祝日を除く)◎購読料金 税抜月額5,300円
発行所 〒104-8178 東京都中央区銀座5丁目15番8号・時事通信社

ウォータースポーツのまちづくり と地方創生

くろかわ せいいち 徳島県三好市長
黒川 征一



三好市は四国のほぼ中央に位置し、人口約2万6000人、面積は約722平方キロ、四国一広い自治体面積を誇り、その大部分が山と川から成るまちです。国指定天然記念物・名勝地に指定された大歩危・小歩危、桃源郷と称される祖谷の原風景やかずら橋をはじめ、有数の観光資源に恵まれ、インバウンド着地型観光の成功事例として紹介されるなど、その土壌に育まれてきた豊かな自然や文化遺産の宝庫であります。

一方で、地域経済は急激な人口減少と高齢化により大変厳しい状況下であり、基幹産業である観光産業の振興は重要で、その発展は地域経済活性化に大きな影響をもたらします。大歩危・祖谷を中心とした魅力的な観光資源を国内外へ発信し、観光地としてのブランド化に取り組みとともに、三好市が春夏秋冬・老若男女が楽しめる「まるごと観光地」となるように、整備促進を図っています。

また、三好市の中央部を流れる吉野川は多くの景勝地と自然を有し、上流では急流を要するスポーツ、下流の池田湖周辺は静水面を要するスポーツに適した環境を持つ、世界でも稀な環境を併せ持っています。

この素晴らしい地域資源を活かして、2017年に国内初の「ラフティング世界選手権」、翌2018年にはアジア初の「ウェイクボード世界選手権」を開催しました。二つの世界選手権開催を

2018年(平成30年)
12月27日[木]
第10857号

目次	
連載	2
新・地域力と地域創造③	
地域の起業連携で、観光客増え定住広がる＝島外から続々と人を呼び込む好循環―山口県周防大島	
行政EXPRESS	7
茨城県、千葉市、福岡市、滋賀県湖南市、東京都八王子市、高松市、宮崎県、浜松市など、宮城県東松島市、新潟県糸魚川市、大阪市	
霞が関かいわい	8
厚生労働省	
一家言	9
2018年回顧かるた	
木曜連載	12
ブランド力向上へのヒント④	
居住意欲度ランキング＝神奈川県が初の1位！ 大阪府は上昇中	
木曜隔週連載	14
自治体広報の落とし穴④	
SNS運営のリスク＝反応の薄い投稿を漫然と続けていないか	
書籍案内	19
新自治体学入門―市民力と職員力	
県政の課題	20
佐賀県知事・山口祥義氏	

時事通信社

地域の起業連携で、観光客増え定住広がる

島外から続々と人を呼び込む好循環Ⅱ 山口県周防大島

金丸弘美
食総合プロデューサー

山口県の離島・周防大島が、交流、観光、移住・定住で注目されている。この10年間で観光人口が80万人から100万人に増加。2013年から移住・定住のためのツアーを開催し、そこから定住した人は50人を超えた。また、若い人たちの農業、農産加工品製造などの起業も生まれている。観光協会が主催している定例イベントも定着して、それが島外から多くの人を集客。町が推進している農家・漁師と連携した民泊修学旅行でも、30校近くが訪れている。

お互いがネットワークを形成することで、集客・販売にもつながる好循環が生まれ始めている。周防大島は、瀬戸内海にあり、淡路島、小豆島に次いで3番目に大きい島だ。主要な産業は農業、漁業、観光。島は対岸の柳井市と大島大橋で結ばれている。JR山陽線大島駅からバスで約20分。人口1万7030人。9550世帯。高齢化率51%。1970年の人口は3万7631人だった。過疎高齢化が進む中で、今、新たに地域が動きだし、雇用を生み出し始めている。

そんな現場を見てほしいと声を掛けてくださったのは「瀬戸内ジャムズガーデン」経営・松嶋匡史さんだ。周防大島観光協会副会長でもある。

松嶋さんは、島へ移住し起業した。妻の智明さんの父親が島の出身。実家がお寺であったことから、智明さんの父親がお寺を継ぐこととなり、智明さん一家は家族が暮らした京都から島へ移住し、智明さんは高校まで島で育った。大学で再び京都へ。そこで知り合った匡史さんと結婚。新婚旅行でパリに行き、そこで偶然入った食品店で魅せられたのがジャム。実際は、果実の形を活かし、さまざまな果物やリキュール、ペッパール、チョコレートなどを加えて作るコンフィチュール。匡史さんは企業に就職し働きながら、ジャムの研究を重ね事業計画を練り、周防大島がミカン産地でもあったことから、原料調達には最も適していると島に移住し起業した。創業は2003年。

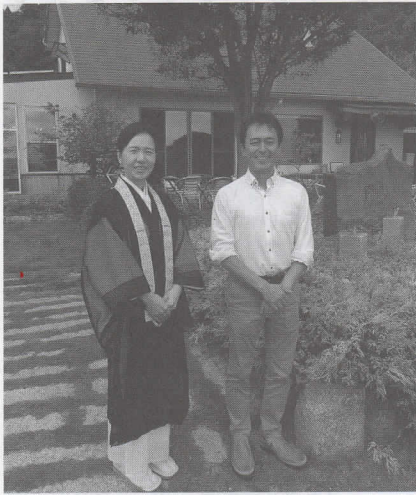
島の海辺で環境が良い場所に、カフェスタイルの店舗を構え、単にジャムを製造販売するのではなく、自然の風景の良さも取り入れ、食べるにふ

さわしいシチュエーションをつくった。そこで、多彩なジャムを使ったトースト、ピザ、ケーキ、ドリンクなどの軽食を提供することで食べ方を提案していった。ジャムが四季ごとに変わり、バリエーションも豊かだ。

また1キログラム10円という価格だった加工用のミカンをはじめとする果実を、100円以上で買い取った。農家との連携を深め素材の持ち味を存分に生かすことで、オリジナルな商品を生み出してきた。その付加価値をプロモーションすることで島外の顧客を呼び寄せ、年間7万人が訪れる人気店に成長。雇用も正社員、パートを含め30人が生まれた。

今では、島内外の農家68軒と連携し、島内で手に入りづらいブルーベリー、イチゴ、ライムなども栽培。農業部門も設けた。島の遊休地も利用されることとなった。年間180種類のジャムを作る。売り上げは約1億円。

妻の実家がお寺で門徒さんの多くが農家であったことから、新たなお寺と地域の連携の在り方と



瀬戸内ジャムズガーデンの松嶋さん夫妻

して注目されることとなった。というのは、地方では人口減から廃寺になるところも増えているからだ。全国からお寺の関係者の視察が増えることにもつながった。

「島全体で100万人の観光客が来ている。うちの店だけで7%が来ていることになる。平日でも広島市、山口県周南市などから人がお見えになります。2〜3カ月ごとに旬のジャムを買うというリピーターの方が多い。試食をして5〜10本まとめ買いをされます。」

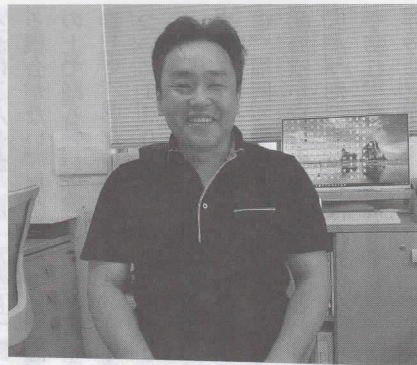
店舗での直販が5割。卸は3割でパン屋さんが多い。ネットやファクス、電話などの通信販売が2割です。直営店での販売の利益率が高い。観光協会にも入っているのは、島全体にお客さんが関わるからだからです。島の仲間と仲がいい。ここ数年でカフェやショップなどの起業が増えている。

ローストビーフを出す店もある。そこを紹介すれば、うちだけでなくよその店で昼食を食べてもらえる。そうすれば地域全体で人を呼ぶことができる。紹介することで、島全体の魅力アップにつながる。夜の売り上げにも直結することになります。それがうちの集客にもつながる。うち1店舗ではできないことです」と、松嶋さん。

起業家仲間のつながりでモチベーション上げる

松嶋さんが島の仲間と言う人たちを、何人か紹介しよう。

株式会社「ジブノオト」経営の大野圭司さん
大阪芸術大を出てWeb制作の東京のベンチャー企業で働いたのち2004年Uターン。大島商船高等専門学校（文部科学省補助事業）の起業家養成塾「島スクエア」で産業と連携した起業のためのスキルアップの塾。そののち島の水族館の指定管理などの仕事をを経て起業。小・中学校の総合学習、高校の社会学習などを、地元の産業と連携して学ぶ講座を企画し実践。また、広島県の修学旅行教材をJT&Bと共同開発したノートを使い、修学旅行の体験を学習につなぐ仕組みもつくった。ほかに自治体や教職員向けの研修で周防大島ツアーを実践するなど、地場産業とつないで起業スキルを学ぶ学習企画を幾つも手掛けている。島のツアーでは松嶋さんの瀬戸内ジャムズガーデンもコースに入り、島の起業を紹介することが行われている。



株式会社オイシーフーズの新村さん

また別会社で、ベネッセコーポレーションと連携した英語塾も行っている。

株式会社「オイシーフーズ」の新村一成さん。
夫婦共に島出身でUターン。周防大島に属する島の一つ浮島（うしじま）で採れるイリコ、ヒジキ、アカモク（海藻）などの加工品の製造販売をしている。自動車の営業をしていたがUターン。親と弟が漁業を浮島でしていたことから、加工業を手掛けるようになる。新村さんが触発されたのは松嶋さん。アドバイスを受け、これまで島になかったイワシのオイルサーディンを開発しての販売を皮切りに、海産物の加工を手掛ける。松嶋さんとは共同で販売開拓を行ったり、デザイナーを新村さんが松嶋さんに紹介したりしている。

養蜂とカフェ経営を行う笠原隆史さん（亜裕美さん夫妻）の「KASAHARA HONEY」。



「KASAHARA HONEY」笠原さん

史さんは山口県岩国市出身。亜裕美さんは大分県日田市出身。隆史さんは調理師で飲食店の仕事をしていたが、親が養蜂をしていたことから自分も学び、環境が良かった島に移住し養蜂を行う。ハチミツの良さを直接伝えたいと、飲食業の経験を生かしてハチミツ販売とハチミツを使った飲食を提供する喫茶店を2016年に開業した。

ほかにも、移住した人の飲食店、ゲストハウスなどがあり、そのメンバーでの連携やツアー、視察、観光でのコラボレーションが行われていて、今、大きな動きとなっている。

フラダンスイベントに全国から集まる

松嶋さんの所属する観光協会の活動も目覚ましい。専従スタッフは4人。それに地域おこし協力隊の強力なメンバーが2人参加している。一人は

米国の商社で働いていたという篠原哲夫さん。もう一人はベルリンで絵画をはじめ展示会などの企画運営をするキュレーターをしていた新井謙太郎さん。彼らに加わり、新たなチャレンジを次々と手掛けている。

観光協会では、独自に島の資源をうまく生かして集客につなげている。その一つがフラダンスだ。7月中旬から8月半ばまでの7〜8週間。毎週土曜日の昼夜に行われ、全国から130チームが周防大島へやって来てフラダンスを披露する。このうち7〜8割は宿泊することから、大きな観光にもつながっている。

周防大島はハワイのカウアイ島と姉妹島の提携をしている。というのは明治時代、島から3914人もの人々が周防大島からハワイへ移民として送り込まれた。当時、島は人口増で経済的に困窮する人が多かったことから移民が奨励され、ハワイに移住したという経緯がある。そのことからハワイに親戚がいるという人も少なくない。かつては修学旅行でハワイに行くことも行われていたという。島内には「日本ハワイ移民資料館」もある。

2007年5月にハワイからホクレア号が来航し、そこから周防大島でのフラダンスが始まった。いきさつを話してくださったのは、周防大島観光協会事務局長の江良正和さん。

「船で来たハワイの方がフラダンスを披露した。初めて本物を見て、妖艶さに惹きつけられました。

島には、おばあちゃんたちのフラクラブがあり、幼稚園でも行われていた。もし島でフラダンスを行えば、本当のハワイのようになるのではとやってみようということになった。瀬戸内のハワイを目指す。2008年スタートしました」

最初は、「ハワイでもないのに」と周辺で笑われたという。しかし、20チームが集まり海辺のそばでフラダンスを披露した。

「当時は観客もほとんどいなくバラバラ。『練習か』と言われたものでした。それで2年目から道の駅でお昼に踊ってもらい、広く知ってもらうようにしたり、広島に営業に行ったり、DM（ダイレクトメール）を出したり、ネットで呼び掛けたり、草の根的な活動をしました」と言う。

そこから意外な反響が生まれた。実は、各地でフラダンスの愛好会があることが分かった。ところがほとんどが、ホールなどで踊っていて外で踊る機会がない。周防大島では、海の近く、天然芝の上で踊るということにこだわった。それが功を奏して、2年目は40チーム、3年目は60チーム。ついに130チームにまで広がり、観客も1チームの踊りごとに2000から3000名が集まるほどまでになった。参加は、近隣の広島、山口を中心に、福岡、愛媛など、四国、九州。そして首都圏、北海道からの参加者も来るといって一大イベントに広がった。参加者は小旅行を兼ねてグループで島を訪れ、フラダンスを楽しむ。ほとんどが宿泊を伴うことから、島に移住しオーガニックの農業を

始めた若い人たちが約20人と一緒にマルシェと食、ハワイのマツサージ「ロミロミ」を実施するなど、さらに地域とのつながりを深める試みが行われるようになった。

もう一つの地域資源の発掘では、「ふるさとオケ」でのトーナメント方式による歌のイベントがある。カラオケの審査と、最終オーディションでは、参加者が0・01点のポイントを入れることができるというもの。カラオケの機械会社・第一興商がスポンサーで、中国新聞と共催で実施されている。

「この島は作詞家・星野哲郎さんの出身地です。島の人たちでシニアの方には、いろいろと活動と呼び掛け

てもネットを見ない、フアクスがない、車がないといふ人もいます。私たちは、どうもシニア対応に弱い。そこであえ



観光協会のメンバー。中央が江良さん

て飛び込んでみよう」と始めたのがオーディション方式のカラオケです。5カ月の間、毎週参加してもらい、カラオケで点数が出てセミファイナルを行う。最終回で優勝を決めるというものです。チャンピオンはCDデビューができる。昨年(2017年)は600名近くが参加しました」と江良さん。

作詞家・星野哲郎氏は、北島三郎「風雪ながれ旅」、小林旭「昔の名前で出ています」、島倉千代子「思い出さん今日は」、渥美清「男はつらいよ」、水前寺清子「三百六十五歩のマーチ」、島津亜矢「袴をはいた渡り鳥」、瀬川瑛子「長崎の夜はむらさき」をはじめ、多くの歌手に詩を提供し数々のヒット曲を生み出している。そのことから島では大きなホールもあり、かつて北島三郎をはじめ大物歌手のコンサートも開かれていたという。そういった背景があったことから始まったのが「ふるさとオーディション」だ。

それだけではない。自然の活用もある。周辺には、三つの小さな有人離島がある。その一つ前島は人口10人。そこから何かできないかと相談があり、始めたのが観光ホテルウオッチング。

「周辺には小型イルカのスナメリがいる。そこで航路を使つての観光ホテルウオッチングを始めました。カジュアルに乗れる27人乗りの船で、1時間1人560円。これが好評で、今では3000名近くの人が来ています。ゴールデンウィークや夏休みは増便しています」(江良さん)

あるものを生かすという形がうまくつながっている。現在、お遍路さんのマップを作製し旅になく試み、サイクリングコースでの旅、また山口県岩国市の岩国空港が近く海外客も来ていることから、今後はインバウンドにも力を入れていくという。

有料による定住・移住ツアーが好評

周防大島での町の動きも見逃せない。

「周防大島町体験交流型観光推進協議会」が町につくられ、独自に民泊での修学旅行の誘致を行ってきた。広島県商工会議所が中心となり、六つ協議会がつけられ協働で活動が行われている。

修学旅行生に来てもらい、島の漁業・農業の民家に泊まり、ミカン収穫・稲刈り・酪農などの農業体験、釣り、地引き網、たこつぼ漁など漁業体験、梅干し作り・餅つき・干物作りといった味覚体験など60以上のメニューがある。この中にはフラダンスや、地元起業家と学ぶキャリア教育も含まれている。農家民泊体験登録をしているのは200軒。そのうち100軒ほどが、実際に受け入れをしている。2017年実績で、27校(4060人)、そのほかの団体(54人)。小中高校まで受け入れている。営業は協議会メンバーと合同で、町長、職員が出向き、九州、関西のエージェント向けに行っている。今後、これらを広く観光につないでいくのが将来構想だ。

特に注目されているのが、移住・定住のツアー

だ。コーディネーターは、ファイナンシャルプランナーの泉谷勝敏さん。泉谷さんは大阪からの移住。奥さんが島出身で実家があったことから、Iターンして起業した。2012年に発足した周防大島町定住促進協議会事務局長でもある。

2015年、総務省が運営するサイト「全国移住ナビ」において、開催された移住PR動画コンテスト。これを泉谷さんが監督・演出を手掛けた。総務省からの、動画作製に関する補助金の上限は500万円だったが、泉谷さんは島の男性と2人で制作した。極限まで抑えた制作費は70万円。広告代理店が制作する月並みな自治体のPR動画ではなく、何気ない都会と田舎の暮らしを比較した動画は、移住を考えているサイトユーザーの投票で見事総務大臣賞を受賞した。

周防大島町の役場には岩国と周防大島のケーブルテレビのチャンネルをつくる部門がある。ここに町が出資している。これは2011年テレビがアナログから地上デジタルになり、難視聴区域が出るということからケーブルテレビを導入。ケーブルテレビの行政チャンネルを持つことができる。と話が合ったことから1チャンネルを設け、町での番組作りが始まった。毎週1、2番組が制作されている。

番組では、俳句のコーナーがあり、小学生の投稿が多く長寿番組になっている。高校生参加企画のイベント、島内で行われた文化講演会の放送などが流れている。

この中で泉谷さんは、2012年から地域おこし協力隊のメンバーとの連携で定住した人の番組を流し始めた。島の暮らしを伝えるものだ。番組を1週間流した後、動画投稿サイト「ユーチューブ」にもアップしている。これが好評でアプローチにつながり、移住・定住ツアーの集客と定住に大きく貢献することとなる。

移住・定住ツアーは年間3回で、実施は、1月と5〜6月、10〜11月の間だ。2013年から行われている。このツアーがかなり個性的な内容だ。しかも有料で行われる。1泊2日。大人9800円。小学生4800円。好評で毎回10人ほどが集まっている。このツアーの約30%が定住につながっているという。

ツアー内容は、次のようになっている。

JR大島駅に集合。そこからバスで移動。まずオリエンテーションがある。その後の講義は、大島郡医師会会長・嶋元徹さんによる医療制度の説明。続いて、前述の「KASAHARA HONEY」の訪問。それから島の人たちと海の清掃活動。そして温泉に入り、島の人たちとの交流会が行われる。2日目は、泉谷さんの島の暮らしマナー講座。島の物価や家賃、家計、平均収入などを自分の体験を踏まえて紹介する。そこから町を散策して空き家を見学し紹介。島の郷土料理のお昼ご飯。最後に瀬戸内ジャムズガーデンを訪問して移住までの経緯、計画、起業から運営までを学ぶというもの。

「観光と定住は似て非なるもの。観光は思い出をつくるもの、定住は人生をつくるものなので、お客さま扱いのような、おもてなしではなく、生活者の目線で伝えています」と泉谷さん。

このツアーの中に海の清掃がある。地元の人たちと行うもの。当初、反対意見もあった。お金を払って参加しているのに、掃除をさせられたくないのでは、というものだ。

「島に移住をしたいという人には、きっと海への憧れもあると思います。綺麗な海は、清掃が行われて保たれていることも知ってほしい。住んでいる人と協働で作業をすることで、コミュニケーションをとってもらうのが狙いです」

移住を希望する人たちに、事前にしっかりと島の暮らしや人を知ってもらい、計画性を持ってきてほしいということからツアーが組み立てられている。

島では、お試し移住用の古民家が用意されている。2週間で2万円。3週間で3万円。4週間4万円で借りることができる。ツアーの後、実際、お試し体験をしてしつかり島を知り移住した人もいます。

島では移住のための特別な補助金をつけるというようなことは、行っていない。それでも移住・定住につながるのには、島の暮らしを具体的に示せる視点が、来る人に伝わっているからにはかならない。今後、さらなる地域連携で島外の人々を魅了するに違いない周防大島だ。